

【論文】

高齢社会における日常的余暇活動への参加と生活の満足度について

中 溝 一 仁

1. はじめに

1-1 本論の背景

景気が良いとは言えない状況が続いている我が国ではあるが、世界に目を向ければ生活条件の厳しい国は多々あり、それらと比べれば日本は豊かな国である¹⁾。しかし、解決されるべき課題が数多くあることもまた事実である。その中の一つが「豊かさの実感」という問題であろう。生活水準はある一定を超えているにせよ人々は漠然とした不安を抱え、精神的にどこか満たされず、生活の満足感が十分に得られてはいない²⁾。なぜ満足感が十全に得られないのか。その背景には以下のような諸要因が絡まっている。

第一は何よりも人々の生活の満足感に関する重心の変化がある。「物の豊かさ」から「心の豊かさ」へのシフトである³⁾。1970年代に「心」が「物」を逆転して以降、一貫して人々は「心の豊かさ」を重視するようになった。「ある程度、物が満たされたから」という理由と「これ以上、経済的な向上が期待できないから」という物的・経済的側面と、「今現在、心が満たされていないから」という精神的側面とが複雑に絡み合いながら、日常生活における「心の豊かさ」志向がトレンドとなっているのである。「心の豊かさ」を支える仕組みが社会に求められている。

第二は高齢化である。我が国が高齢社会に突入してすでに多くの歳月が過ぎた⁴⁾。国際社会がこれまで経験をしたことがない急速な高齢化と健康寿命の伸長⁵⁾は、高齢者に多くの「余暇活動可能時間」をもたらした。しかし、余暇は何もしな

ければ単なる「余った暇」でしかなく、生活の満足度向上をもたらすことはない。社会保障費の抑制という観点からも、高齢者が健康的な生活を営める条件の整備が必要である。

第三は地域社会の衰退である。マンションの管理組合が住民同士の挨拶を禁止したというトピックスは現代を象徴する衝撃的な事例⁶⁾だが、自治会の活動状況⁷⁾を見ても地域社会における人と人との繋がりは徐々に、しかも確実に弱まりつつあることが分かる。近所のしがらみやつきあいに伴う煩わしさが減少しても、同時にそれはそこに暮らす人々の帰属意識を薄れさせている。周囲に対する無関心と無配慮とが社会全体の「クレーマー化」や「キレル高齢者」⁸⁾の増加要因ともなりかねない。近所の目を気にしないことは、「恥」⁹⁾による行動の抑止効果の低下ももたらす。人間はたとえ煩わしさが伴っても人との関わりの中でこそ刺激を受け、生きているという実感を得ることができる。現代社会における人と人との繋がりの安定的な維持は、重要かつ難しい問題である。

第四は現役就労世代における長時間労働である¹⁰⁾。長い間、QOLやワークライフバランスなどの言葉が謳われながらも、依然として長時間労働が続き、それに伴うストレスや抑鬱状態による自殺、肉体的な疲労の蓄積による過労死などの事例は枚挙に暇がない。これらは就労世代における生活の満足度を低下させるだけでなく、この時期の余暇活動への参加を阻害し、結果として「余暇に対する準備のない高齢者」を大量に生み出し続ける状況をもたらしている。

最後は社会に対する安心・安全観¹¹⁾の低さで

ある。殺人事件¹²⁾や刑法犯罪の認知件数¹³⁾が減少しているにも関わらず、肌で感じる「安全観」はあまり向上していない。内閣府が実施した「治安に関する特別世論調査」¹⁴⁾によると、「最近の治安に関する意識」は過去のデータよりも若干の改善が見られるものの、依然として8割を超える人々が「悪くなったと思う」と答えている¹⁵⁾。こんなにも多くの人々が、治安が悪化していると感じている状態ではとても安心して暮らせる社会とは言えないであろう。原因の一つは、言われなき殺人やテロ（に類する事件）、ホラー映画を彷彿させる猟奇的犯罪が増加していることであろう。若者の死因に占める自殺の割合は高く、高齢者の自殺も少なくない。このことは、背後に「若者の将来への不安」や「高齢者の現状への不満」が潜んでいることを意味している。また、安全観の高まらないもう一つの原因が地域の繋がりの低下であることは多くの人も認識している¹⁶⁾。地域社会の衰退や近所づきあいの減少は住民同士を無関心にして、相互監視という窮屈さの軽減と引き替えに安全観の低下をもたらす要因ともなっている。どのようにしたら社会的に安全観を高めることができるのだろうか。

以上のような現状認識と問題意識とを踏まえた上で注目されるのが、ひとりで行う余暇ではなく、他者との関わりを持つ「ふれあう余暇活動」である。これは先に挙げた諸問題の根本的な解決までには至らなくとも、それらを緩和する一助となると期待されるからである。本論は高齢者の日常的な余暇活動と、それがもたらす満足感について2016年に静岡市内で実施した質的調査をもとにする「ふれあう余暇活動」の意義に関する考察である。

1-2 「ふれあう余暇活動」への期待

余暇活動を行うにはそれに見合った「時間」が必要不可欠だが、昨今、社会的問題ともなっている長時間労働という働き方はさほど変わりそうもない¹⁷⁾。この問題が根深いのは、仮に長時間労働

の問題が瞬時に解消されたとしても、当面は余暇活動への備えのない退職者が増え続けることである。その意味で就労時代に余暇活動を行うことは、「今」の生活を充実させるだけでなく、退職後の活動や仲間作りのためにも大切である。「余暇に対する準備のない高齢者」が輩出され続ける現状に鑑みて、彼らにどのような活動の場を提供し、生活の質を高めてもらうかは検討すべき進行形の課題である。

地域社会の衰退に対して、自治会などを中心とした単位で行われる余暇活動（後述する「健康体操」などの活動）に、かつての共同態的な「強いつながり」は望むべくもないが、気軽な余暇活動への参加によって地域や団体への緩やかな帰属意識を育むことはできる¹⁸⁾。今回の調査では「ふれあう余暇活動」への参加により、今まで近所の道ですれ違っても挨拶をしなかった人たちが軽い会話を交わすようになる、などの効果が語られている¹⁹⁾。外に出て他の人と会話することは日々の生活に潤いをもたらすと同時に、高齢者の健康寿命を延ばし、医療費や介護費用が抑制されるという好ましい結果が期待される。こうして「まったく随意に行う楽しみ」（Dumazedier 1962=1972: 19）の活動が増えれば、当然のことながらその「楽しみ」は人々の「心の豊かさ」感を高めていく。

就労世代の余暇活動への参入は「時間」の問題だけではなく、「考え方」の問題も大きい。長時間労働の問題は容易に変化を期待できないが、長くて健康な老後を見据えて現在の活動の優先順位を決める、という発想の転換は非常に重要である。そうは言っても、古くから染みついた「日本的な勤労観」²⁰⁾や遊ぶことへの「潜在的な罪悪感」、長時間労働を受容するメンタリティなどが変わることは容易でない²¹⁾。かつての農村では休日や「カミゴト」と呼んでいた。「働かずにぶらぶらしていることは不徳徳とされ」、「休むにも遊ぶにも、すべて神事・祭礼になぞらえて」（生活科学調査会編 1970: 132）いたという²²⁾。そのくらい「働

かない状態」は特別なことなのである。しかし、定期的な（例えば毎週1回などの）活動ではなく、また参加するために特別なスキルを必要としない気軽な活動が増え、その情報が必要とする人々に届くようになれば、高齢者だけではなく就労世代もそうした余暇活動に参加する機会は増える。仕事以外での人間関係を構築する第一歩として「ふれあう余暇活動」には意味があり、長時間労働自体の解決にはならなくとも、人々の働き方や勤労観、余暇観に多少なりとも変化をもたらして生活の満足度の向上に寄与するであろう。

「社会に対する安心・安全観」の低下は一朝一夕には解決されない問題である。近年、我が国はSNSの普及や個人情報保護法²³⁾の施行なども影響して、顔の見えない匿名性の高い社会になった。その結果、個人は生身の感覚のないまま匿名で他者と関わりを持つという新たな人間関係を当たり前のように持つに至った。孤立しがちな人をいかに社会に招き入れ、現実味のある人との繋がりをどのように築くのかを検討することは喫緊の課題である。

1-3 本論の目的

地域社会のあり方や働き方も含めて今の社会がすぐには変化しないという認識のもとに、人々の生活の満足度が高まる現実的な可能性について考察することが本論の目的である。具体的には以下の2つをその目的とする。

第一には、「余暇に対する準備のない高齢者」が参加しやすい余暇活動とは何か、また引きこもりがちな高齢者が活動に参加するための条件は何かを見出すこと、逆に言えば余暇活動への「参入障壁」が何かを見極めることである。筆者は以前、「定期的な活動で、ある一定のスキルを必要として、その団体のメンバーになる」ことを前提とした「趣味的サークル」(中溝 1999)に関する量的調査を実施したことがあるが、そこへの参加は、「それらの条件を満たさない者」にとっては「参入障壁」となるものであった。そこで今回は「定

期的ではなく、スキルを必要とせず、メンバーにならない」など「参入障壁」の低い余暇活動について、参加者がどのように考えて行動し、どのような満足感を得ているかを明らかにしたい。

第二には、個人の余暇の選択と集団とのマッチングについて考察する。人間は社会生活を送っていれば何らかの団体や社会階層に所属する。現役就労世代であればその職業上の階層があり、退職者であれば退職時の社会階層（主に職業的階層）がある。人が属する準拠集団²⁴⁾として大きな地位を占めていた地域社会の凝集性が薄れつつある現代において、職業が持つ階層的な意味合いは相対的に強くなっている。このことが、余暇活動や余暇団体の選択に影響を与えている可能性が高い。この「社会階層と選択する余暇団体との関係、またその集団とのマッチング」について検討を行う。

なお、本論では「余暇活動」という言葉を使用しているが、これは「能動的な活動を行う余暇時間」を想定している。調査等によっては「家で何もせずにのんびりくつろぐ」も余暇として分類されるが、ここでは自由な時間のアクティブな行為（特に他者と関わるような）のみを「余暇活動」とする。本論における「余暇活動」は、高齢者における健康増進に関わる活動も含めて「自由時間に積極的・能動的に行う楽しみの活動」とする。

余暇活動における「参入障壁」には経済的な問題もある。金のかかる活動で、その典型が「旅行」である。これは「ハレ」にあたり、日常の「ケ」とは異質なものである。旅行は経済的な理由からあまり実行できない人も多く存在する。本論では「ハレ」と「ケ」のうち、「ケ」の余暇活動に焦点を当てている。多くの人々にとって、日常の「生活の満足度」を高めるためには「ケ」の活動がより重要だと考えるからである。

2. 先行研究と高齢社会の余暇について

2-1 余暇に関する先行研究

日本国内の余暇・レジャーに関する研究は「観

光」からのアプローチが多く、「観光業」と「消費・経済」に関連した数量的データと研究は数多く存在する一方で、日々の暮らしに根ざした活動とその満足度や効用を質的に論じたものは案外少ない。定量的なアプローチは説得力を持ちやすいし商業的な利用価値も高いが、多額の金に移転しない日常における余暇活動の考察は利用価値が低いと考えられがちなのかもしれない。また余暇活動について、「日本では特に余暇に関わるモノやサービスが強調される傾向にあった」（間々田 2005: 200）こともその原因の一つであろうか。国内では藪田や瀬沼が比較的幅広い視点から余暇活動の意義や具体的な内容についての研究を行っている。

他方、世界に目を向ければ、余暇研究はホイジンガの『ホモ・ルーデンス』（Huizinga 1938）やカイヨワの『遊びと人間』（Caillois 1967）、コルバンの『レジャーの誕生』（Corbin 1995）などが有名であるが、余暇研究において外せないのがデュマズディエで、その研究成果は多くの余暇研究に少なからず影響を与えていると言ってよい。余談ではあるが、上記の4名のうちホイジンガがオランダで、残りの3名の出身がフランスであることは興味深い。両国には「バカンス」という日本人にはなかなか上手に使いこなせないであろう長期休暇のシステムがあるが、本論では「日常的な余暇」と「集団への帰属」という観点からデュマズディエについて触れておきたい。『余暇文明へ向かって』の中で彼は余暇を次のように定義している。

余暇とは、個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気晴らしのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会参加、自由な創造力の発揮のために、まったく随意に行う活動の総体である（Dumazedier 1962=1972: 19）。

余暇の機能として、1.休息、2.気晴らし、3.自己研鑽、の3つに分類し、その活動の前提として本人による活動への意味づけや主体性が大切であると言う。この定義に従えば、いわゆる「家族サービス」はそれが「家庭から課せられた義務」であれば余暇活動ではなくなる。また、人々の社会参加や集団、社会階層については次のように述べている。

（活動に対する能動的態度は）「社会階層の文化的規律への同調的適応を意味するものではなく、集団、階級、社会の活動に対して（中略）責任をとろうとする積極性を意味する。そして他方、社会の側からも一定の制約を受ける。この参加的態度は、家族、会社、労働組合、自治体、あらゆる集団や階層の活動にかかわっている」（同上、247）。

（余暇活動に対する）能動的態度とは、「社会的文化的活動への最適な参加を通じて、人間の潜在性の十全なる開花を可能ならしめるような肉体的、精神的な構えの総体である」といえよう（同上、247）。

※（ ）内の補足は筆者による

余暇に関して社会参加の可能性から集団や階層についてまで考察が及んでいる。余暇活動は労働力の再生産や単なる気晴らしという機能だけではない。それは人間が人と人との関わりの中で生きる上で、この上なく大切な生活時間であることを示唆しているのである。

2-2 高齢社会における余暇の意味

日本語の「余暇」は読んで字のごとく「余った暇」を意味し、「労働」に対する対義語として用いられている。では「労働」とは何か。日本における労働が西洋的な意味での苦役では必ずしもないという指摘もある（藪田 2012: 54）が、キリスト教的原罪意識はないものの、今日の日本でも義

務的な苦役として捉えられるのが一般的で、まさに西洋的な労働観の影響によるものと言ってよい。したがって、義務的な「仕事」の対義としての「余暇」は、労働力を再生産するための「休息」時間だと考えられている。だとすれば、すでに労働から解放された退職高齢者にとっては、生活のすべての時間が余暇となっており、その意味で余暇はもはや現役就労世代における「余った暇」としての「余暇」とは意味合いを異にする。デュマズディエの言う「義務から解放された」機会としての「休息」ではないからである。

とはいえ、現代社会において「労働」と「余暇」という二項対立的な概念の境界自体が曖昧になってきたという側面にも留意しなければならない。例えば、「仕事の範疇には入らない有償ボランティア」や「余暇とは呼べないようなハードかつ真剣に行うアマチュアスポーツ」、また「趣味が昂じて起業した人の仕事」など、仕事が遊び化したり、遊びが仕事化したりしてどちらともすっきり分類できない活動が増えてきているのである。かつてウェーバーが指摘したように、営利活動は「スポーツの性格をおびることさえ稀ではない」(Weber 1920=1993: 366) ののである²⁵⁾。とりわけ、労働のない高齢者のレジャーは単純に「余暇」とは呼びづらい。「楽しむために働く」や「家族に強く勧められて(半ば強要的に)行う健康体操」など、「仕事の余暇化」と「余暇の仕事化」が交錯する現代である。義務としての労働をしない高齢者のすべての活動を「遊び」と言うこともできるが、ホイジンガの言う「生活維持への直接的な欲求を超え、しかも、生の営みの中に一つの意味を付け加える」(Huizinga 1938=1989: 12) ものなのかもしれない。

もう一つ欠くことのできない視点が、我が国における退職者の余暇に対する準備の欠如である。上述したように、現役就労世代の長時間労働は、ほとんどの自由時間を労働力の再生産のための休息時間にさせている。1916年施行の工場法で、我が国において初めて長時間労働対策が盛り込ま

れて100年が経つ。しかし、その後は改善が叫ばれて久しいが、社会的な潮流としては大きく変化していない。その結果、「壮年時代には余暇に乏しかった日本の勤労者も、ひとたびリタイアすれば『余暇の大海』に投げ出される。余暇への構えも余暇能力の開発も不十分な定年族は、与えられた余暇という資源の活用策に、生きる課題として取り組まざるを得ない」(藪田2012: 231) ことになる。

重要な論点の最後に、「余暇の義務化」²⁶⁾ を挙げておく。義務である労働を持たない高齢者にとって余暇活動それ自体が義務化しかねない、という問題である。以前に行った調査(中溝1999)において、仕事を持っている人の余暇でもこの義務化が起きていた。しかし、義務としての仕事を持たない高齢者にとってそれが発生する可能性はより高く、今回の調査でもそれを裏付ける回答を得た。この「余暇の義務化」は活動の満足度を低下させ、ひいては生活の満足度の低下をも招く。「余暇活動なんだから、負担が大きければやめればよい」という意見もあるだろう。しかし、多くの人にとって様々なしがらみや近い人との人間関係に強いられて加わる活動は、実際のところひとつやふたつではない。特に交友関係が広く活発に活動する人は、自分の活動に協力してもらうことと引き替えに「つきあい」を人からより求められ、結果として余暇が義務化しやすい。地域社会が衰退しつつあるとは言え、近所づきあいに近い活動の一環としてグループに加わらねばならないケースもある。余暇の団体であっても、不本意にも役職に就いたために任される仕事が増え、活動の義務化が進むこともある。職を持たない高齢者にとって「仕事に忙しいから」という言い訳はもちろん成り立たず、それだけにそれらの依頼や要求を断りにくい。

3. 調査の目的と概要

3-1 調査の目的

本調査の主な対象は、高齢者が主体のカルチャー講座や健康体操を行うグループの参加者である。ちなみに筆者は、ある程度集団の凝集性が高い「趣味的サークル」を対象とした調査をかつて行った。この際、このサークルを「自発的な参加によって成り立つ、余暇活動を行う小集団」と定義している。この集団の活動はボランティアのような利他的な活動とは異なり、基本的には自分(達)の欲求を満たすための利己的な活動である。また、これを2つに分類し、前者を野球やバレーボールなどのスポーツや、吹奏楽やオーケストラ、コーラスなどの音楽活動など、集団でその活動をするためのスキルを必要とし、また仲間との協調が必要なものを「集団的余暇活動」とし、後者を将棋や社交ダンス、テニスなどの個人競技で、活動を楽しむためにはある一定のスキルが必要なものの、結果が個人(及んだとしてもペアを組むパートナーまでに限られる)に帰結し、また少人数でも活動可能なものを「個人的余暇活動」とした。いずれも参加者が所属する集団はその成員にかなりの程度「集団への帰属」を求めている。こうした集団では人との繋がりは濃密なものとなり活動の満足度も高まるが、他方で人間関係の煩わしさが増したり、役職を引き受けざるを得なくなったりして「余暇の義務化」を招きやすいものでもあった。

以上のような結果を踏まえ、今回の調査では「若い頃からの活動経験やその活動に関するスキルを必要としない活動」と、「人とのふれあい」はあるものの比較的「義務化しにくい活動」をその中心とした。つまり、特別な技術を必要とせず、参加へのハードルの低い余暇活動である。面接調査によって「余暇活動と生活の満足度の関係」や「余暇に対する準備のない高齢者」における余暇の広がり(活動の種類や人間関係の幅など)について、以前の調査と対比しながら検証することを

目的としている。

3-2 仮説について

今回の調査を行うにあたって次のような仮説を立てた。

1. 現役引退後に余暇活動に積極的な人は、就労時代に何らかの準備を行っている。
2. 日常生活において他者とのコミュニケーションが少ない人は、生活の満足度が高まりにくい。
3. 活動への参加に関しては男女差があり、特に男性が外の活動に参加するためには何らかの肩書きを必要とする。

仮説1について、以前の調査における「集団的余暇活動」は、周囲の人に迷惑をかけないためにも活動のスキルを必要としていたため、就労時代から継続的に行われていることが多かった。一方、今回の調査では「定期的ではなく、スキルを必要とせず、メンバーにならない」活動の参加者が、若い頃から積極的に余暇活動を行っていたかどうか、という点を調べてみた。仮説2は、他者とのコミュニケーションが激減せざるを得ない第一線を退いた高齢者において、人とのコミュニケーションが少ない場合には生活の満足度も低くなる傾向があるのではないかと考えたからである。仮説3は、事前の複数人への聞き取りから、高齢者における余暇活動への参加態度に男女差が看取されたことによる。男性の参加者がなかなか増えないという団体の代表者の声から、「余暇の義務化」を招く恐れはあるものの、役職を与えると男性の参加可能性が高まる(もしくは、肩書きがないと活動に出てこない)ことが推定された。

3-3 調査の概要

静岡市²⁷⁾に住む高齢者を中心とする団体の活動についての調査と、その役員や参加者への面接調査を行った。2016年8月から10月末にかけて5つの活動・団体について見学、または参与観察(団体によってはその両方)を計11回実施し、そ

のうちの2つの団体については代表者にヒアリングを行った。活動の参加者には8名から話を聞くことができた。また、全国に支部を持つ高齢者団体の事務局長にも直接話を聞いている。今回は本研究の目的に照らし、3つの活動・団体に焦点を当てる。それぞれの活動・団体の概要は下記の通りである。なお本論では、後述する「S型デイサービス」と「でん伝体操」の2つを合わせて「健康体操」と表現している。

今回の面接調査の対象者は「大きな資産は持たないが日常生活を送る上で必要最低限を上回る程度、またはそれ以上の経済的余裕（ストック、フローのいずれか、または両方による）を持つ高齢者」である。

【団体の活動に関する調査】

「S型デイサービス」調査回数：2回

社会福祉法人静岡市社会福祉協議会が各自治会等に委託している地域の健康維持活動である。「体の不自由なお年寄りや一人暮らしのお年寄り、家に閉じこもりがちなお年寄りなどの生きがいくくりや社会的孤立感の解消、健康な体づくり」をその目的としており概ね65歳以上が対象者となる²⁸⁾。「町内会・自治会」が主体となり、主催者（代表者とボランティアスタッフ）、参加者のいずれもその地域の住民である。自治会をまたぐ参加は妨げないが、実際のところ越境して参加する人はほぼ見られない。もともと静岡・清水両市が合併する以前の旧清水市での活動を起源として平成5年から行われており、現在多くのグループは基本的に月2回開催している。参加費は無料だが、参加者同士の親睦を図るために月に最低1回は各参加者の実費負担で弁当を出し全員で会食することが決められている。今回は駿河区で行われている活動を調査した。

「しぞ〜か でん伝体操」調査回数：3回

静岡市が市内62ヶ所（平成28年度）で地域包括支援センターや地元の介護事業者等に運営を委

託して実施している健康維持活動である。1ヶ所あたり20名の定員で1クール13回、1回2時間と決められ、1施設で年間3クール開催される。65歳以上で、要介護認定を受けていない人を対象に年1クールのみ参加することができ、参加費は無料である。市内の住民であれば参加エリアは問わないが、比較的会場周辺の住民が多い。介護のプロが運営するため、より健康の維持・増進に特化され、その活動の効果が具体的な数字で測定され、評価される。上述の「S型」よりも、システムティックに運営されている一方で、参加者同士のコミュニケーション機会はあまり多くなく、「S型」のような集団としての紐帯は見られない。今回は葵区で行われている活動を調査した。

「NPO法人 静岡団塊創業塾」調査回数：4回

現代表者（当該団体では「理事長」の呼称）によって2011年に創設される。「中高年世代に対して生きがいを持って社会に参加できる『仕組み』『仕掛け』『居場所』を提供する事業を行い、生き活きと暮らせる明るい社会作りに貢献」することを目的としている。静岡市中心街に活動拠点を持ち、多様なセミナーやカルチャーの講座を頻繁に開催している。会員は年会費3,000円を支払い、非会員はイベント毎に500円を支払って参加する。具体的には次の3つのセミナーと食事会について、許可を得た上で参与観察を行った。①団塊創業塾交流会、②旅の話で楽しむ会、③しあわせ学講座、④ワンコイン（500円）ランチ会。

【個人への面接調査】調査対象人数：8名

「S型デイサービス」 ボランティアスタッフより男性1名、女性1名。なお、ボランティアスタッフは主催者側として運営を主導する。基本的には無償だが、一定期間続けると運営主体より謝礼の品が贈られる。

「でん伝体操」 参加者より女性1名、ボランティアスタッフ（主催者側ではないが、無償でその場の活動のお手伝いをする）より女性1名。

「団塊創業塾」 男性2名（うち1名は理事長）、女性2名（うち1名は副理事長）。

面接調査対象者の年齢と性別は、62歳女性、64歳男性、66歳女性、67歳女性、70歳男性、72歳女性、76歳男性、76歳女性。いずれも正社員の就労経験があるが、結婚を機に退職した女性が2名、50歳で退職した女性が1名、早期退職制度を利用して退職した男性が1名、残りの3名は定年まで正規雇用として就労していた。経済状況は「一般的で、日常生活には困っていない」から「それなりに恵まれた状況で余裕がある」人までいたが、いずれの経済状況も「必要最低限」以上であった。婚姻状況については既婚、独身、死別が含まれる。なお、各個人のフェイスシートは紙幅の関係で割愛する。

4. 調査結果と考察

4-1 以前の調査と今回の調査について

かつて静岡市において行った「趣味的サークル」についての質問紙による量的調査では、「趣味的サークルの活動を行っている人は、それをしない人と比べてある一定の生活の満足度を高められる」という結論を得た。また、活動に関するスキルを持つことが前提となる「集团的余暇活動」への参加者は、学生時代（あるいは子どもの頃）にその活動を経験し、その後の就労期間にも行っていることが多く、そうした経験が「今」を楽しむだけでなく、退職後の余暇への備えにもなっていることが判明していた。

一方、今回の調査対象とした活動は、参加するためにその内容に関する知識や経験、またスキルを必要としない。参加の準備が不要で役職の義務もないという意味で「お客様」的に参加することができる。カルチャースクールの側面もあり、参加するためのコストも低い（楽器や用具などのコストが不要で、参加費自体も安い）、心理的、経済的なハードルは相対的に低い。また、今回の調査対象者のほとんどは「趣味的サークル」の活

動経験は持っていない。その意味で今回は、前回の調査では対象としなかった「趣味的サークルに所属していない人」の話聞くこととなり、余暇活動に関するスキルを持たずに定年を迎えた高齢者の余暇の実態を窺わせるものとなっている。

ところで、上述の「趣味的サークル」には、「その活動をする」という明確な目的がある。例えば、野球チームには「野球をする」という目的を持った人たちが集まっている。野球をすることの結果として、身体を動かし健康的になるかもしれないが、それは副次的な産物に過ぎない。一方、今回調査の対象としたカルチャー講座や健康体操などでは、それらの活動を通して参加者個人が「知識」や「健康」を得ることに主眼が置かれている。同じ効用（「知識」や「健康」）が得られるならば、人が集まるカルチャー講座でなくてもインターネット上の情報でも放送大学の視聴でもよく、また、集団で行う健康体操でなくてもひとりで行うラジオ体操やウォーキングでも構わないはずである。しかし、その中で「ふれあう余暇活動」を選択し、参加している点には留意する必要がある。つまり、他者と関わる余暇活動への参加に何らかの意味があるのではないか、ということである。

4-2 各団体の調査に関する考察

「S型デイサービス」

高齢者に対する介護予防の活動は、「運動・体操」「ゲーム」「コミュニケーション」の3つから成るが、これは総じて「レクリエーション」という表現がより近く、まさにこの活動を表すのに適している。意外だった点は、一般の参加者20名に対してボランティアスタッフ（以下、「VS」とする）が15名という構成である。実に全体の4割以上がVSなのである。これは、この活動を運営するにあたってVSの数がそれだけ必要であることを意味するのではない。VSにとってはボランティア活動を行うという行為自体が「有意義な活動」となっている可能性が高いのである。この

活動の代表者が「男性の中にはVSだったら参加するが、ふつうの参加者だったら参加しない、という人も結構いる」と述べているが、この証言からは2つのことが読み取れる。一つは、VSとしての「利他的余暇」²⁹⁾の活動は、サービスを受けるだけの一般参加者と自らとを差別化し、場合によっては優越感すら抱かせるものとなっている点である。スタッフとしての役割と肩書きを持って活動するVSは生き生きとして、積極的にその場を盛り上げようと努力もしている。一般参加者にサービスを提供する立場ではあるが、それをすることによって自らの満足度をも高めている。したがって、その意味でVSもまた、このサービスの受益者となっているのである。もう一つは、男女による違いである。今回調査した団体において、女性は一般参加者もVSも数多くいたが、男性はそのほとんどがVSで、一般参加の男性は1名のみであったことは特筆に値する。

「しぞ〜か でん伝体操」

近所づきあいを面倒と感じる人にとって、基本的に初対面同士の集まりであるこの活動は、煩わしさの少ない「非近所づきあい」という新たなコミュニケーション機会をもたらし可能性がある。この活動も「S型」同様、参加者の多くは女性であった。高齢者の人口に占める（健康な）女性の割合が男性よりも高いことを考慮しても、役職などの肩書きが付与されない「一参加者」という心理的障壁が、女性よりも男性の方が高いことを示唆している。そうだとすれば、出たがらない男性を外に出すための方策を考える余地は大きい。基本的にこの活動にはサービスの提供者とその受益者という二者しかなく、そこに肩書きの付く役職が入る余地はない。なお、今回調査を行ったグループでのみ例外的に外部から希望したボランティアの女性が1名活動していた。

「NPO法人 静岡団塊創業塾」

参加者の目的の中に、活動を通して「人の役に

立ちたい」「活躍したい」という欲求が見て取れた。同団体のセミナー講師を引き受けたり、ランチ会のボランティアスタッフをしたり、運営側の手伝いをするなどして一旦この活動を自分の「居場所」とした人にとっては、それが日々の生活に欠かせない精神的な支えとなっているようである。

先に取り上げた2つの健康体操との共通点としては、男性の参加率が伸びないという点が挙げられる。男性は自治会や防災の活動以外にあまり参加せず、役職を与えないと外に出てこない傾向があることは、この団体の代表も述べていた³⁰⁾。「いかに男性を外に連れ出すか」について常日頃頭をひねりいくつか策は練るものの、決定打となるアプローチは見出せていないという。

同団体の役員や活動の参加者に対して面接調査を実施し、加えて別途、数名にも話を聞いたところ、元中学校教諭、元大学教授、元会社経営者、元上場企業社員など、いずれも学歴、社会階層とも比較的高かった。代表によると、「そんなつもりはなかったし選んでいるわけではないが、結果的にそうなっている」という。意図したものではなくとも、結果として同質的な集団になっているのである。退職時の社会階層が相対的に低い（と考えている）人にとっては、潜在的な居心地の悪さが、継続的に活動に参加する際の障害になっている可能性もある。

4-3 活動の意義

「健康体操」の活動について

今回の調査で分かった興味深い点がいくつかある。その一つが人間関係に関するもので、「その団体の活動に参加している消極的理由は、人間関係が煩わしくないから」ということである。「S型デイサービス」における積極的な参加理由は、「楽しさ」や「やりがい」、「健康の維持」である。「以前は別な会の活動に参加していたが、人間関係が煩わしくなったので足が遠のいた」という話があった。積極的な参加理由というものは一時的に失われることがある（例えば、ある時のコンテ

ンツが自分に合わなかったり、楽しくなかったりした場合)が、多くの人にとって人間関係さえ煩わしく感じなければ惰性でも参加は継続される。「S型デイサービス」の参加者は、「人とふれあい、他人とコミュニケーションをとることは自分の生活にとってプラスになる」という認識を持っており、こうした前提は、常に大きな満足感を得られなくてもそれが活動をやめる理由にはならないことを意味している。また、仕事を持たない高齢者には自由になる時間が多いため、その活動に魅力を感じなくなっても慌ててやめる必要はなく、他に魅力的な活動が見つかるまではその活動に留まるのである。「今後(S型デイサービスの)ボランティアスタッフではなくなり、一般の参加者となったとしてもこの活動に参加したいか」という質問に対しては、「続けたいと思う」(76歳女性)という当初の仮説とは異なる回答もあった。現在の人間関係が心理的に負担でなければ、活動へのインセンティブは比較的強く保たれるのであろう。

他方、「でん伝体操」は、1クールの開始時点では人間関係がほぼない状態で始まる。したがって、「知らない人の中に入ること」への抵抗感を除けば人間関係については可も不可もない。近所同士の間人間関係もある程度引きずって始まる「S型デイサービス」とはこの点で大きく異なる。「でん伝体操」の参加者にとっては、活動のコンテンツそのものに意味があるか、つまり健康維持・増進に役立つ介護予防の効果を感じられているか、という点が重要なポイントである。もちろん、活動を続けていくうちにグループ内である程度人間関係が構築されていく。その結果として、新たにできた仲間との交流も活動を続けるインセンティブの一つにはなり得るが、「でん伝体操」は年1回しか参加できないため(3-3を参照)、意識的に個人的な関係を構築しない限り基本的にその関係は維持されない³¹⁾。

以上のことから、「S型デイサービス」への参加動機としては健康の維持・増進だけでなく、「地域社会における人間関係の再構築」や「他者

とのコミュニケーション」が挙げられるが、「でん伝体操」に関してはあくまでも健康維持が参加の目的となっている。地域社会の紐帯維持に一定の役割を果たすという観点からは、「S型デイサービス」の方が優れていると言えよう。

「NPO法人 静岡団塊創業塾」の活動について

高齢者の「生きがいづくり」や「社会参加」の支援を目的とする「団塊創業塾」への参加理由は、上述した健康体操とは異なる。会費を払ってこのNPO法人の会員になることはできるが、会員にならなくともその都度参加費を支払えば、自分の興味のある活動に単発で誰でも参加できる。各参加者はこれまでも何度かその団体の活動に参加していることが多いため、「良くは知らないが何となく顔は見たことがある」という関係が多い。

今回、3回のセミナーの調査から、この活動の参加者はみな強い知的好奇心を持っているということが分かった。時間と金を使ってあまりよく知らない人の集まる場所に来る人たちであるから、ある意味当然のことなのかもしれないが、ここに参加する人たちの定年前の職業的な社会階層が比較的高かったこともその知的好奇心と無関係ではあるまい。「労働の疲れを癒す休養や気晴らしを必要としない高齢者」(藪田 2012: 231)が、「自己開発」によって生活を充実させていることは藪田も指摘している。

セミナーとは別に、同団体が主催する「ランチ会」にも参加した。他人とのコミュニケーションが容易で雰囲氣的に非常に気軽な会である。その際の複数の参加者からの証言によると、この団体の活動に参加する人々はふだんから活発に外に出て活動しており、定年後も職を持っていたりして社会との関わりが希薄ではない。むしろ、ますます元気にその傾向を強めているようであるが、他方で課題としては次の点が挙げられる。何よりも、参加者の確保である。セミナーの開催には一定数以上の参加者が不可欠であるが、調査を行ったうちの1回は、報告者、理事長、副理事長、参

と観察者である筆者の4名のみだった。強い拡大志向を持った団体ではないため、この状況が続くようではセミナーの継続自体が困難になろう。もう一つの課題は、参加者の裾野の拡大である。同じ人がリピーターとして何度も参加することは歓迎されるべきことであるが、一方で、同団体の理事長は「居場所がない男性に居場所を提供する」という目標を持っている。したがって、これまであまり外に出てこない人たち（特に男性）を活動に参加させるという意味での裾野の広がりが期待されるが、現時点でこれらの層の参加を促すことには成功していないという。掲げる理念の実現のためにも、また活動の継続のためにも、新規参加者の獲得は必須の課題と言えよう。

5. 仮説に対する検討

5-1 仮説1について

「現役引退後に余暇活動に積極的な人は、就労時代に何らかの準備を行っている」については、今回の「定期的ではなく、スキルを必要とせず、メンバーにならない」活動において、必ずしも若い頃から余暇活動を活発に行っているわけではないことが窺えた。面接調査後に追加で回収したメールの回答に次のようなものがあった。「(若い頃は) 結構残業が多く、活動できませんでしたが、休みは子供が幼少の頃はドライブしてました。(中略) 自由な時間はなかったので今みたいには活動はしていません」と(70歳男性)。「若い頃は無趣味だった」という回答も多い。中学校の教諭をしていた女性は、「当時はバスケット部の副顧問をやっていたが、自分のプライベートの時間がまったくと言っていいほどなかった」という。「そもそも余暇時間が確保できなかった」という問題が多く語られていたように、今回の調査では定期的な余暇活動や長期間継続している趣味を持つ人には出会わなかった。こうして見てみると、退職後に参入障壁の低い活動に参加している理由は、就労時代に確固たる余暇活動を持てな

かったためとも考えられる。逆に言えば「定期的ではなく、スキルを必要とせず、メンバーにならない」活動が、「余暇に対する準備のない高齢者」の自由時間を充実させる機会を提供しているのである。

5-2 仮説2について

「日常生活において他者とのコミュニケーションが少ない人は、生活の満足度が高まりにくい」については、ある程度経済的に余裕があり、広い意味での家庭環境(夫婦関係や孫の存在など)が安定していれば、必ずしも多くの対人コミュニケーションがなくても、生活の満足度を高く保てることを読み取れた。例えば、「70歳まで仕事をしていたので、(特に親しい)友人はいない」と回答した人が、現在の生活については「満足している」(76歳男性)と答えている。妻と二人暮らしで特に会話もなく旅行に行くこともないが、夫婦関係に問題はなく、隣家には息子家族が住み、「4人の孫に会うことが楽しみ」と述べている。他者とふれ合わないことにより他人と自分との生活を比較しないため、いわゆる「相対的不満」を抱かないのかもしれない³²⁾。同様に、夫婦でクルージングや海外旅行など(いわゆる「ハレ」の活動)には行くが、日常的に会うような友人はいないという67歳の女性も「孫と会うことが一番の楽しみ」と答えている。彼女は健康体操に参加する以外に女性専用のフィットネスクラブに通い、月1回のフラワーアレンジメント教室にも参加しているが、参加者同士お互いの家や電話番号は知らず、人間関係はその場に限られており決して濃密とは言えない。夫との会話もほとんどないというが、ストレスを感じない程度の気楽なコミュニケーションを他者と持つことが、生活の満足度を下げない要因となっているようである。

老後の生活において「孫の存在」が大きな意味を持つことについては、他の回答者も語っている。62歳の女性は、夫と不和で離婚も考えていると言いながら、それでも現在の生活については「満

足している。特に孫の活動を見に行くことが楽しみ」と語った。他人とのコミュニケーションが希薄でも、また夫婦関係に問題があったとしても、近くに会うことのできる孫がいることが、生活の満足度を維持したり高めたりする要因となっている。しかし、この「孫の存在」が与える影響は、人間の生物学的要因とも考えられるし、他の楽しみが見出せないことの結果とみることも可能だ。本論の趣旨からは外れる問題なので、ここでは今後の課題として指摘するに留めたい。

もう一点、仮説2に関連して、人間関係と「余暇の義務化」について分かったことがある。活動の参加者が人間関係に煩わしさを感じていたら、その活動の満足度は当然低下する。それが余暇の活動であれば、なおさら無理して参加し続ける必要もない。事実、調査の回答の中に「以前、別な活動で輪投げをやっていたが、いろいろと人間関係がいやになってやめた」(76歳男性)というものがあつた。一方で、彼は「この活動(S型サービス)の人たちはみんないい人ばかりなのですごくいい」と言い、ここでは「利他的余暇」の活動である「ボランティアスタッフ」を担っている。また、「(活動上、人間関係を)煩わしく感じるがなくてはならないが、(そうならないように)避けている」(62歳女性)といったものや、「まずは一度参加してみて、人間関係が面倒になるところには次から行かないようにしている。自分で選んで面倒にならないようにしている」(70歳男性)という回答もあつた。このように活動の場を変えても継続的に余暇に関する活動に参加している人は、人間関係において何らかの工夫や問題回避の行動をとっているのである。さらに、人間関係が濃密になり過ぎたり、役職の負担が重くなったりして余暇が義務化することを意識的に忌避している人もいる。毎月18種類ほどの趣味の活動を行い、「予定を詰めすぎて身体がしんどいことがある」と回答したほどの男性だが、「義務」となるような役職は一つも持っていない。いずれの活動についても役員やスタッフなどの役職には就

かず、すべて「一参加者」という立場で参加しているのである。「一参加者」であれば、その活動に興味を失ったり、人間関係が疎ましく感じたりすることがあれば、いつでもすぐに参加をやめることができる。「余暇の義務化」を防ぐために「一参加者」という立ち位置が意図的に選ばれているのである。『レジャー白書2013』(日本生産性本部2013)では、第3章で「やめる理由 はじめの理由—余暇活性化への道筋」というテーマを取り上げているが、上述の「人間関係の煩わしき」と「余暇の義務化」に関係する視点はなく、調査項目にもそれに類する質問は存在しない。しかし、実際の活動をするのが心を持った生身の人間である以上、余暇活動を「やめる理由 はじめの理由」について、精神的な問題を避けて通ることはできない。なぜなら、その目的が「心の豊かさ」や「生活の満足度向上」のためであるからだ。この点については量的調査ではなかなか浮かび上がってこない可能性も高い。いずれにしても、余暇における人間関係や役割の負担についての視点は不可欠であろう。

5-3 仮説3について

「活動への参加に関しては男女差があり、特に男性が外の活動に参加するためには何らかの肩書きを必要とする」という仮説については、「肩書きがあつた方が参加するケースもあるが、肩書きがなくても参加することは十分あり得る」という曖昧な結果が出された。これはその人が所属する団体の特性(例えば、人数の多い集団内にはいくつかの小グループがあり、中間管理職的な役割も含め多くの役職があることなど)や、その人個人の学歴や在職中の役職経験、退職時の社会階層などによっても影響される可能性があり、また、男女による違いも大きいのかもわからない。「(役職に就くように)頼まれたから(ボランティアスタッフに)なった。そうでなければふつうの参加者でも構わなかった」(76歳男性:最終学歴は中学卒業)という回答からは、参加条件に肩書きの有無

が影響していないことが見て取れる。それとは反対に、「社会的地位を持っていた人ほど一参加者にはなれない。女性の方が気軽に（精神的な抵抗が少なく）外に出て来られる。男性は（これまで築いてきた）プライドをなかなかリセットできないのではないのか」という全国に支部を持つ高齢者団体の事務局長の話もあった。「男性は自分の（立ち）位置が定まらないところにわざわざ参加したがる」とも言う。会員全員に名刺を作って配布することを計画中で、これは特に男性に対して身分証代わりにしてもらい、出会った人に「〇〇の△△です」と自己紹介をしやすいとともに、ひとつの肩書きを与えて会員であることの満足度を高めるためだと言う。「ふつうの（一般の）参加者でいろいろな活動をするくらいなら、役員をやりたい。人の役に立ちたいという気持ちもあるし、みんなと同じではちょっと・・・役職があった方がやる気になるし、その方がいい。だからやるなら絶対にボランティアか役職のあることをやりたいと思う」（62歳女性：最終学歴は短大卒業）と答えた女性もいた。一方で先に述べたように、すべての活動において「一参加者」を貫きながら活発に活動する男性もいる。この仮説3については今のところ確たる結論は出せないが、面接調査を継続した上で階層性や性差による相違を含めた検討を改めてすべきであると考えられる。

6. おわりに

6-1 結論

今回の調査によって、高齢者の余暇活動の選択が就労時代の社会階層によって影響を受けている可能性のあることが分かった。さらに特徴的な点は、余暇の選択に留まらず余暇活動との関わり方まで以前の職業的地位や社会階層などが影響していると推察されることである。「所属していた階層の与える影響」は、余暇団体の選択、活動内容の選択、利己的か利他的か、集团的余暇活動か個人的余暇活動か、単発的か継続的か、など広範囲

に及んでいる。例えば、利他的活動について言えば、体面維持のためか、ノブレス・オブリージュ（noblesse oblige）的意識によるものかは判然としないものの、ある程度社会的地位の高い仕事を引退した人には、利他的な活動を行うことで自分自身の満足度を高めようとする意識が認められた。面接対象者ではなかったが、今回の調査対象の団体に所属する元大学教授（男性）は、「すごく腹が立ってストレスが溜まるけど、介護施設でボランティア活動を続けてる。コノヤロー、と何度も思っ辞めようとも思ったんだけどね。でも続けてるよ」と語っていた。一般化できると明言はできないが、特に男性は自ら「ありがとう」と言うよりも、人から「ありがとう」と言われる方が活動を続ける動機となり得るようである。

第二に、条件さえ合えば準備がなく定年退職を迎えた人でも外の活動に参加する可能性のあることが分かった。すでに述べたように以前の調査では、退職後に「集团的余暇活動」に参加するためには、学生時代にその活動を行っているか、就労時代の比較的早い段階からその活動を始めていることが条件として必要な場合が多く、いずれの経験もない人は「個人的余暇活動」に向かう傾向が明瞭であった。ところが、今回の調査対象とした特段のスキルを要しない「ふれあう余暇活動」については、次の3つの条件のうちの1つでもあれば活動に参加する可能性は高まることが判明した。一つは「外的なきっかけ」である。それは妻からの誘い（特に、家に引きこもりがちな無職の男性の場合）であっても、友人からの誘いであっても、たまたまテレビでその活動を見たことであっても構わない。「外的なきっかけ」（自ら望んだわけではない、という意味での）があれば、人は様々な活動に参加する方向に動く。2点目は、個人のパーソナリティである。人見知りせず外向的な人や好奇心の強い人は、外的なきっかけがなくても参加の障壁が低い余暇活動には積極的に関わろうとし、またその活動を通して生活の満足度を高めることができています。3点目は、「階層と集団

のマッチング」である。就労時代に一定の社会的地位を持った人は、その地位に見合う団体や活動に出会ったとき、その団体に所属し、継続的に活動に参加する。参加予備軍はホームページやSNS³³⁾、案内チラシや口コミなどでその団体の活動内容や構成員、グループの雰囲気や予め窺い知ることができる。その団体の社会的な位置づけやメンバーの社会階層が自分自身の(考える)社会的地位に相応しいと判断できれば、その団体の活動に参加する(もしくは見学に行く)だけの条件は満たされる。自らの階層を高く考える人はそのようなメンバーから成る団体を選び、自らを低く捉えている人は参加をためらう。結果的にその団体は同質集団化するのである。参加後にミスマッチングが発生した(または発見された)場合、その人にとってその場の居心地は悪く、次第に足が遠のくことになる。したがって、活動に関する正確で十分な情報提供が行われれば現在の社会状況にあっても、「ふれあう余暇活動」が高齢者の生活の満足度を高める可能性は十分にあり得る。

6-2 今後の研究課題

これまで見てきたように、就労時代に余暇の準備ができずに定年退職を迎えた人々にとって「定期的ではなく、スキルを必要とせず、メンバーにならない」活動は参加しやすく、また、それが生活の満足度を高める要因となることも分かった。「ふれあう余暇活動」は、外に出て他者とコミュニケーションを取るという意味で社会参加の一形態である。高いスキルを必要とする「集団的余暇活動」は、そこで得られる満足度も高いが参入へのハードルも高い。他方、健康体操や緩やかな参加形態のセミナー活動などは参加への障壁が相対的に低く、高齢者の孤立を防ぐ観点からも余暇活動の重要なジャンルの一つであり続け、その拡充が今後ますます望まれるようになるであろう。

時間に制約のない高齢者にとって、余暇活動を行う上でより欠かせない条件が「経済的コスト」である。ゴルフやフィットネスクラブなど、昔は

アッパークラスのみ享受できると思われていたものが、今では多くの人がかなり容易に近づけるようになっている。また、旅行や余暇に関して高齢者を対象とした特典や割引も多々あり、本論でも取り上げたようにインシャルコストやランニングコストをあまり必要としない活動もある。以前に比べて高齢者が余暇活動を行う際の経済的障壁は低くなっているのである。そうは言っても、経済的コストが活動の選択の幅を制限しないわけでは決してない。面接調査の中で、ふだんの生活と日常的な余暇活動にはあまり金を掛けず、「ハレ」の余暇として一点豪華主義的に海外旅行を楽しむという回答があった。一方で、健康状態にまったく問題はないが、旅行そのものに行かないという人もいた。根底に金銭的な問題があるのかもしれない。また、日々の生活を充実させようと、長い自由時間により多くの活動を行おうとする人や、「ハレ」と「ケ」の両方の余暇を希望する人もいるであろう。これらの人々の欲求を満たすためには、当然それなりの金が必要になる。年金が減らされ続ける状況の中で、この経済的な余裕の有無がもたらす余暇の選択への影響や、その結果として生活の満足度に与える影響も興味深い研究対象である。

地域社会の衰退や自治会機能の低下が生活の満足度にどう関係するかなど、今回具体的に取り上げなかった課題も多い。本論では割愛したが、自治会とは別に「ご近所コミュニティ」と称して仲間を募り地域で様々な活動を行い、結果として地域社会の紐帯を取り戻しつつある活動を行っている人からも話を聞いた³⁴⁾。この活動がそこに住む高齢者に日々の楽しみを提供し、余暇活動の大きな柱になると同時に、地域の繋がりを回復させ、防犯・防災という自治会の機能をも補完しているという。

目を凝らしてみると、あちらこちらに高齢者を中心とした余暇活動的な小さなグループが点在していることに気づく。マイクロ単位では非常に多様な試みがなされているのである。多くの場合、こ

これらのグループはあまり積極的に情報発信をしなかったり、SNSで非公開グループを形成していたり、まったく外部に働きかけていなかったりするので、広範な認知がされにくい。高齢者の生活の満足度を高める可能性を秘めたこれらの集団が、今後どのようにしてその活動や参加者の幅を広げていくのか（または消滅していくのか）、また孤立しがちな人、特に男性をどのように取り込んでいくことができるのかなど、「ふれあう余暇活動」に関する検討すべき課題は尽きない。

今後はこれらの課題を踏まえつつ、高齢者主体の余暇団体に対する調査という外からのアプローチと、個人に対する面接調査という内からのアプローチを続け、量的調査によっても今回の調査結果を検証したい。また、かねてより興味深い現象として捉えられている「余暇の義務化」についても、より深い考察を行っていききたい。

【付記】

- ・面接調査における主な質問項目は以下の通り。
 - なぜこの活動を続けているのですか？
 - 活動をしていて、どんなところが楽しいですか？
 - 活動をしていて、不満に感じることはありますか？
 - 人とふれあうことは楽しいですか？
 - 活動上、人間関係を煩わしく感じることはありますか？
 - スタッフについてどう思いますか？
 - 生活全般について、他の参加者や他のスタッフの人と比べてご自分は恵まれていると思いますか？
 - あなたにとって日常生活での楽しみは何ですか？
 - 生活上、何か不満に感じていることはありますか？
 - 現在の所属する団体の活動は日常生活の一部になっていますか？
 - 今回の活動以外、どんな余暇活動をしていますか？
 - ふだんから遊んだり話をしたりするご友人はいますか？
 - あなたは現在の生活に満足していますか？
 - 現在行っているその他の活動は何ですか？（仕事、ボランティア、町内会、その他の余暇、その他）
 - 時間の使い方について、すべて自由時間ですか？
 - 同居家族は仲がいい方だと思いますか？

基本的なフェイスシート項目

- ・このほか、必要に応じてその個人に合わせた質問を行った。

【参考文献】

- Benedict, Ruth, 1945, *The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture*, Boston. (=1967, 長谷川松治訳『菊と刀—日本文化の型』社会思想社.)
- Caillois, Roger, 1967 *Les jeux et les hommes, édition revue et augmentée*, Gallimard. (=1990, 多田道太郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社.)
- Corbin, Alain, 1995, *L'Avènement des loisirs (1850-1960)*, Aubier (Paris). (=2000, 渡辺響子訳『レジャーの誕生』藤原書店.)
- Dumazedier, Joffre, 1962, *Vers une civilisation du loisir?*, Éditions du Seuil. (=1972, 中嶋巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社.)
- Huizinga, J. Verzamelde Werken, 1938, *Homo ludens*, Proeve eener bepaling van het spel-element der cultuur. (=1989, 里見元一郎訳『ホイジンガ選集1 ホモ・ルーデンス』河出書房新社.)
- Merton, K. Robert, 1949, *Social theory and social structure : toward the codification of theory and research*, The Free Press. (=1961, 森東吾ほか『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- Merton, K. Robert, 1957, *Contributions to the Theory of Reference Group Behavior, Social Theory and Social Structure*, revised ed., Glencoe, Illinois: The Free Press. (=1991, 森東吾ほか『社会理論と機能分析』青木書店.)
- Weber, Max, 1920 *Die protestantische Ethik und der Geist* 《des Kapitalismus》. Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie. (=1993, 大塚久雄訳『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店.)
- 瀬沼克彰, 2000, 『21世紀余暇の創造—利他的活動の増大』遊戯社.
- 瀬沼克彰, 2002, 『現代余暇論の構築』学文社.
- 生活科学調査会編, 1970, 『増補 余暇—日本人の生活思想』(増補第4版) ドメス出版.
- 藪田碩哉, 2012, 『余暇という希望』叢文社.

中溝一仁, 1999, 「趣味的サークルのもたらす満足感とその存在意義について」立教大学大学院社会学研究科論集第6号。

公益財団法人 日本生産性本部, 2013, 『レジャー白書 2013』生産性出版。

間々田孝夫, 2005, 『消費社会のゆくえ』有斐閣。

- 1) 日本の名目GDPは世界第3位(2015年統計)で、決して貧しい国とは言えない。
- 2) 内閣府の平成27年度「国民生活に関する世論調査」によれば、「現在の生活に対する満足度」は20年前の平成7年度の結果と比べて微減(「満足している」+「まあ満足している」の合計が平成20年は72.7%に対して平成27年度は70.1%)している。また、「レジャー・余暇生活」についても同様(平成20年度の満足が60.3%、平成27年度のそれが59.2%)である。
- 3) 同上の調査より、「物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい」という問いに対する回答について、「心の豊かさ」が「物の豊かさ」を1979年に逆転(「心重視」が40.9%、「物重視」が40.3%)し、全体の流れとしてその差を広げて現在(2015年において「心重視」が62.0%、「物重視」が31.9%)に至っている。
- 4) 国連の定義によれば、日本は2007年に高齢化率が21%を超え「超高齢社会」になっている。また、平成27年版高齢社会白書によると、2014年10月1日現在で65歳人口が総人口に占める割合(高齢化率)は26.0%となっている。
- 5) 世界保健機関(WHO)の発表によると、2015年の日本の健康寿命は74.9歳で世界1位である。
- 6) 神戸新聞2016年11月4日夕刊。神戸市内のマンションで管理組合の理事を務めている男性(56歳)の「理解に苦しんでいます」という題の投書が掲載され、インターネット上で物議を醸し出した。これによると、住民総会で小学生の子を持つ親から「知らない人にあいさつされたら逃げるように教えているので、マンション内ではあいさつをしないように決めてください」という提案があり、他の住民からも「あいさつが返ってこないのが気分が悪かった。お互いにやめましょう」と賛同の声があがり、「あいさつ禁止」が決定されたという。
- 7) 1968年の町内会・自治会の参加頻度は「だいたい参加する」が町村部では70.2%、市部では49.1%であったが、2007年には「参加していない」が51.5%、「年に数回程度」が35.8%となっている。内閣府「平成19年版国民生活白書」から、内閣府「住民自治組織に関する世論調査」(1968年)、「国民生活選好度調査」(2007年)より。
- 8) JR6社や日本民営鉄道協会などの調査によると、鉄道係員に暴力を振るった加害者の年齢別では60代以上が2014年度まで5年連続でトップだった。週刊東洋経済2016年3月14日号第1特集「キレル老人」にシニアのトラブル等が取り上げられている。
- 9) ベネディクトは『菊と刀』の中で次のように述べている。「日本人の生活において恥が最高の地位を占めているということは、(中略)各人が自己の行動に対する世評に気をくばるということを意味する」(Benedict 1945=1967: 259)。周囲に自分を知る人がなく「恥」の恐れがない状況は、逸脱行動に歯止めがきかなくなる可能性がある。
- 10) 総実労働時間は、正規雇用が減り、パート比率が高まると減る。また景気後退によっても労働時間は減少する。正規雇用に限ってみれば、景気状況が芳しくないにも関わらず直近15年で年間30時間程度しか減っていない。
- 11) 敢えて「観」を使用。「安全」は物理的に大丈夫という状態を指し、「安心」は精神的に大丈夫と思える状態を指している。それに対する人々の考え方の変化は、社会状況が反映されていると考えられる。
- 12) 厚生労働省の平成27年人口動態統計月報年計によると、他殺による死亡者数は2015年に313人と1日1人を下回り、2005年の600人の半分近くに減少している。
- 13) 警察庁の「犯罪統計書 平成26年の犯罪」によると、刑法犯罪の認知件数は平成14年をピークとして平成26年ではこの時期の半分以下となっている。
- 14) 内閣府「治安に関する特別世論調査」(平成24年7月実施)より。
- 15) 「あなたは、ここ10年間で日本の治安はよくなったと思いますか」との問いに対する回答。平成18年12月の調査結果と平成24年7月のそれとを比較すると、「よくなったと思う」は2.4%から2.5%

- に、「どちらかといえばよくなったと思う」は8.9%から13.3%に、また「悪くなったと思う」は37.7%から28.6%に、「どちらかといえば悪くなったと思う」は46.6%から52.6%に変化している。「悪くなったと思う」の回答が減り「どちらかといえば悪くなったと思う」が増えているが、2つの合計は依然として81.1%と高い水準である。
- 16) 同上の調査において、「治安が悪くなった」と答えた人にその原因を尋ねたところ、「地域社会の連帯意識が希薄となったから」という回答が54.9%でトップとなっている。
- 17) 本論を執筆中の2017年1月現在、電通社員の長時間労働による自殺に端を発して「働き方改革」が社会的な問題としてクローズアップされている。この問題の解消はもちろん望まれるところだが、現在の議論がもたらす結果は、過労死や働き過ぎによる鬱、自殺を減らす効果はあっても、人々を余暇活動に向かわせるまでの時間の確保には繋がらないと思われる。
- 18) テンニエス (Tönnies) の「ゲメインシャフトからゲゼルシャフトへ」は、今日の日本社会まで連続と続く現実の問題と言えよう。
- 19) 「S型デイサービス」でボランティアスタッフを務める女性 (76歳) に対する面接調査の回答より。
- 20) 日本の小学校などでよく見られた尊徳像の二宮金次郎に代表される勤勉な労働観は、その善し悪しとは別に、日本人に遊ぶことの後ろめたさを植え付けているのではないだろうか。「働くことが是」、「遊ぶことが非」という潜在的な意識は、遊ぶことの得意でない日本人をさらに遊ばなくさせている。
- 21) 静岡県中部を活動基盤とする現役の社会保険労務士の話として、「顧問先企業の就労とライフプランに関するコンサルティングを行っている」と、特に高齢男性における労働から余暇へのパラダイムシフトが進まず、肩書きにしがみついている退職後の活動のイメージを抱くことが容易でない」というものがあった。
- 22) 生活科学調査会編『増補 余暇—日本人の生活思想』の中で、桜井武雄の回答として紹介されている。
- 23) 正式名称は「個人情報の保護に関する法律」で、2005年4月1日に全面施行された。
- 24) マートンのいうreference groupを前提としている。
- 25) ウェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の最終盤で次のように述べている。「営利のもっとも自由な地域であるアメリカ合衆国では、営利活動は宗教的・倫理的な意味を取り去られていて、今では純粋な競争の感情に結びつく傾向があり、その結果、スポーツの性格をおびることさえ稀ではない」(Weber 1920=1993: 366)。
- 26) 筆者が1999年より使用している用語。
- 27) 静岡市の人口は701,757人(2016年11月の推計人口)。葵区、駿河区、清水区の3区から成る政令指定都市であり、全国20都市の中で総人口、人口密度のいずれも最も少ない(2016年10月現在)。
- 28) 社会福祉法人静岡市社会福祉協議会ホームページ <https://www.shizuoka-shakyo.or.jp/join/dayservice.html> (2017年1月現在) より。
- 29) 瀬沼は「利他的余暇」について、「自分の得意なことで、たとえば、アドバイスしたり、情報をあげることもそうであるし、少しの時間や労働、お金を出すことも自分の喜びを倍加させる」(瀬沼2000: 139)と述べている一方で、「利他的余暇の中核は指導者」(瀬沼2002: 46)とも述べている。筆者は「利他的余暇」にボランティア活動を含み、基本的に無償であることを想定としているため、瀬沼の定義とは若干異なる。
- 30) 自治会や防災の活動は数的にも役割的にも男性が中心となっている。役職があり、必要とされる活動には比較的男性は出てくるが、「顔を出す人というのはだいたい決まっていて、しかも限られている」と静岡市内の自治会長の一人が述べていた。参加する男性は「限定、かつ固定化」されており、自治会や防災の活動は参加者の裾野が狭く、また煩わしい近所づきあいの一環という側面もある。したがって、これらの活動は多くの人にとってハードルの低い「社会参加の機会」とは言えないのである。
- 31) 終了者の一部で集まり、独自に「でん伝体操」を続ける人もいるという。
- 32) マートン (Merton 1957=1991: 164~166) 「相対的不満か相対的不満か」を参照。
- 33) 「高齢者はインターネットでホームページなどの閲覧をあまりしないのではないか」と言う指摘は誤りである。2014年末の統計で、65~69歳は69.8%が、また70~74歳は50.2%がインターネットを使

用している（総務省の平成27年版情報通信白書より）。また、今回の調査対象である団塊創業塾の参加者や、調査は行ったが本論で取り上げなかった全国組織の高齢者団体に所属する会員の多くはスマートフォンを使いこなし、カメラ機能で（またはデジタルカメラを用いて）写真を撮り、それをSNSにアップするという現代の若者と比べて遜色のない活動を行っていた。また面接調査の回答に

も「フェイスブックでさらに人間関係が広がって楽しい」（62歳女性）というものや、団体の代表者の「80歳を過ぎた方が来てiPadを学んだりしに来てくれることが楽しい」という話があった。

- 34) 静岡市清水区在住の58歳男性が代表となり、サロンのようなコミュニケーションの場を作っている。現在、建築・土木関連企業の代表取締役。